

豊橋の素晴らしき次代へ

「早咲きの花」撮影秘話語る

菅原監督講演

豊橋市制100周年記念の当地映画「早咲きの花」の原作者と、監督のジョイント講演会がこのほど市内大山町の豊橋

ハートセンターホールで開かれ大盛況だった。講演会は、同映画の原作者で豊橋ふるさと大使・宗田理氏(78)＝名古屋



「当地映画の秘話など熱弁を振るう菅原監督

＝豊橋ハートセンターで

屋市在住が、同センターに毎月通院している縁から、今年1月にスタート、今回は5回目。毎回、多彩なジャンルで活躍する人とジョイント形式で進められている。最初に宗田氏が、愛知県で過ごした幼年時代や戦中、戦後の生活体験など語り、現在の恵まれた社会と対比。しかし、本当に今の子どもは幸せか」と問いかけ、「ぜひ映画を見てそのことを考えて」と話した。

後半では、同映画の指

押を執った菅原浩志監督(51)＝東京在住が登壇。映画製作までの経緯や監督の仕事、ロケハン、出演者らのエピソードなど披露した。まず監督業について、「ロケでの仕事は、撮影開始の合図『ヨイ、アクション!』で始まる。1日に3000回も言うことがある」と。時々、寝言でもヨイと叫び、自分の大声に驚いて目を覚ましてからアクションと締めるなど、爆笑を誘う場面も。

また「撮影前の場所探し

で、大勢の地元の人に尋ねると皆、『豊橋は何にもない』と言う。適地がなければ他県を探そうと思ったが、とんでもない素晴らしい場所が幾つもあった」と豊橋を絶賛。映画の時代設定である昭和18年当時の木造小学校や、陸軍高官が住んでいた公館、大空爆を受けた工廠(こうしょう)に似た建物、縄文時代からの洞穴などがそのまま現存。100パーセントこの当地ロケで完成させた。「奇跡に近いことで、恐るべし豊橋」と感嘆した」と述べた。

小学生の出演者は全員丸坊主におかっぱ頭。「女子のモンペ姿も新鮮で、昔の伝統文化の良さを知った。日ごろは長髪なので気づかないが、円形脱毛症の男子が多く問題を

感じた」と、現代っ子の肉体危機にもメスを。最後に「早咲きの花は、若くして散った当時の高校生にささげたものだが、命を与えられた人は誰でも花を咲かせてほしい。遅咲きでもいい。良かったと言える人生を。そして、豊橋の素晴らしさを次代に伝えて」と結んだ。(星野のりこ)